

# 悠久の河

25

周藤彌兵衛翁物語  
村尾 靖子

## 苦惱

半年が過ぎ、一年が過ぎた。

先の見えてこない岩山の切り抜き工事に彌兵衛は、疲労の色を見せ始めていた。

—もう、後戻りすることは出来ない。—  
—遣り遂げるか…、それとも、岩に頭を打ちつけよと申されるのか

彌兵衛の口調は、だんだん激しくなった。  
「お父さまは、立派な方よ。きっと、この仕事を遣り遂げて下さるわ」

「お答え下され！答えて下され！」

「彌兵衛どの、疲れておいでなのではないかの  
お」

彌兵衛の背後から、静かに声をかけたのは正林寺の住職であった。

「まあ薬草茶でも飲んで、咽を潤して、氣を落ち着かせなさるが良い」

ふと、我に返った彌兵衛の頬には涙のあとが有った。

「恥ずかしい姿をお見せ致した」

「なんの、なんの」

住職は動じなかつた。

「何事をするにも、自分の心に迷いの一つや二つ生じぬようなお人では、人の上に立ち、人の幸せを考えることは出来ますまい。また、迷い過ぎる人も、人の上に立つことには向きますまい」

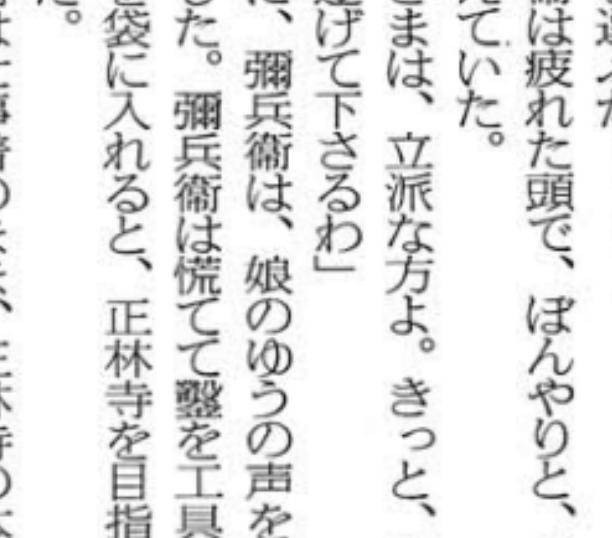
住職は、そう言うと、本堂の障子を開け、外を眺めた。

「もう、じきに、厳しい冬がやって参りますなあ。一年、一日たりとも同じ日は有りませぬ。人間、一生を生き抜くというのも大事業でありますなあ」

住職は、ゆっくりと言つた。

「はあ…」

彌兵衛は住職の勧めてくれた薬草茶を口に含んだ。一服のお茶が、これ程までに身体と心に染み入ったことは無かつた。



画 寺戸良信